

漆芸美術館だより



井川 健《波の舟Ⅰ》2021年 撮影：本山雄一

99

しっ ぶう どとう いま きゅうしつ
漆風怒濤—現在を駆け抜ける髹漆表現—

国際漆展・石川2023 輪島展

「生新の時2023—漆芸の未来を拓く—」トークイベントレポート

石川県輪島漆芸美術館友の会 日帰り見学会実施報告

イベント情報

2023年9月22日発行

漆風怒濤——現在を駆け抜ける髹漆表現——



わ石祭
か万化
い百文
2023

会期 10月1日(日)～11月26日(日) *会期中無休

「髹漆」が意味する漆塗りの手わざ全般は、無地の実用漆器から始まった輪島塗にとって原点であり、長きにわたり集積されてきた技の誉れです。ゆえに、輪島の地で「髹漆」の語を掲げた展覧会を開催することには大きな意味があります。本展で取り上げる作家たちは、漆という素材の捉え方や技術修得の背景、作品の表現手法など多岐にわたっています。24人の手が生み出した作品の数々は、漆芸に携わるすべての人に勇気を与えてくれるものとなるでしょう。

漆の小宇宙

現代、多様に広がる髹漆表現の原動力となっているのは、漆という素材に発し自らの表現の在り方を問い、新たな手法を創出する存在です。その作品世界は、漆の艶にどこまでも広がる無限の可能性を示唆しています。

田中信行氏の《Inner side-Outer side (連続する生命) 2021-N》(図1)は官能的なまでの艶を持つ、漆の皮膜が大きく自立しています。作者は支持体の形を持たない皮膜としての漆に注視し、工芸的な手法で「漆に命を吹き込む」制作を展開しています。



図1 田中信行《Inner side-Outer side (連続する生命) 2021-N》2021年
撮影：山本糾

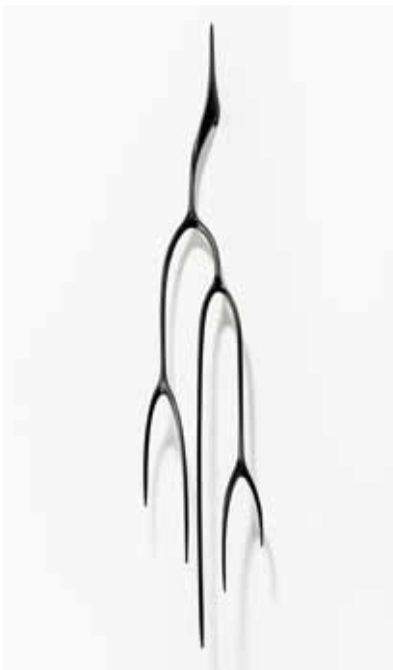


図2 村田佳彦《いわばしる》2023年



図3 荒川文彦《髹漆長手四方盛器「希望」》2014年

富山県南砺市で制作を行う村田佳彦氏の《いわばしる》(図2)は日々人々の暮らしを見守り、時に計り知れない力で圧倒する自然に起因した営みや感情を題材としています。カリグラフィックな木彫と、黒漆で築かれたモノクロームの世界観が、深い畏敬の念を紐解きます。

井川健氏の《波の舟I》(表紙)はヤシの一部を加工し断片をつなげ、できたパーツ同士をさらに接合する作業を繰り返して、起伏の集合で小舟を象りました。限なく磨き上げられた幾条もの反照が容赦なく鑑賞者の目に飛び込みます。

火花散る技術の真つ向勝負

一方で先達に学び、伝統に対する価値観を共有しながら髹漆表現を延伸していく動きにも注目すべきです。彼らは、長きにわたり築かれてきた理想に共鳴しながら、どのように過去を凌駕するかを問い、自らの発現を達成しようとしています。

荒川文彦氏《髹漆長手四方盛器「希望」》(図3)の長辺に対となつて走る溜塗の条は狭い刷毛を用いて精緻にぼかし込まれ、さらに中央にサングの玉を配した銀線の象嵌を伴うも、華美に失することはありません。現代的で端正な作品には、個人の表現の先鋭さを乗り越えて、万人の琴線に触れるような情趣深さがあります。

水口咲氏の《乾漆青田合子》(図4)は青々とした稲がほぼ同じ勢いで一斉に生長する真夏の田圃に感興を得て生まれました。一枚の稲の集合体を捉えた形は、胴張や甲盛で量感を示しながら、

曲線は過剰に豊満にならず、つつましくも深遠な美を宿しています。

「百花繚乱」色漆の世界

成形方法や素材、色彩は世代を追うごとにますます豊かとなっています。次々と輩出する後進たちは漆の表現の可能性にパラダイムシフトを予感させています。

増村真実子氏による《Harusame》(図5)の遙か一点を見据える瞳は、その時々に移り変わリコントロールしきれない作者の心の移ろいを投影し、見る者もまた写し鏡のように対面することでしょう。反復する艶やかな髪束の流れもさることながら、身を包むニュアンスカラーは、脱乾漆造形による人物像に安穏さをもたらしています。

谷川美音氏の《blurred boundary_shoji-pb/y》(図6)は、晩秋のつかの間の小雨模様を、抽象

的な造形と漆の色に託されています。中間色や彩度の高い色漆を取り合わせた、スタイリッシュさは本作の大きな魅力といえます。その源流には古来日本人が抱いてきた豊かな自然への愛着をのびせています。

一口に「髹漆」と言えど、実に多様な作品58点がそろい踏みです。ぜひ会場で、その一つ一つを間近にご確認ください。

(寺尾藍子)

関連プログラム

アーティストトーク 10月14日(土)

林曉 × 田中信行

プレミアムトーク 10月21日(土)

檀ふみ × 室瀬和美 × 小森邦衛

詳しくはイベント情報をご覧ください。



図4 水口咲《乾漆青田合子》2017年



図5 増村真実子《Harusame》2023年



図6 谷川美音
《blurred boundary_shoji-pb/y》
2023年

国際漆展・石川2023 輪島展

会期 12月2日(土)〜2024年1月21日(日) *前後期展示替え・年末休館 12月27日(水)〜31日(日)

本展は、漆芸の国際公募展として1989年に始まり、13回目の開催となります。世界各国から応募があり、漆芸の新しい広がりを考える国際的な展覧会として高い評価を得ています。

漆芸品を用いた現代的な生活スタイルや、新しい感性の提案などを広く国内外に求めることにより、漆器産業の活性化と漆芸を通じた国際交流の推進、さらには人と環境に優しい漆という素材と技の魅力を再認識していただくことをねらいとしています。

表現を主目的としたアート部門、計画的な生産や流通が可能な商品を提案するデザイン部門の2部門制になっています。大賞1点の他、アート部門、デザイン部門それぞれに金賞、銀賞、奨励賞2点が設定されています。また、審査員7名による審査員特別賞も設けられています。

今回の公募では、日本を含む7の国と地域から169点の応募があり、一次審査(写真審査)を経て、79点(うち日本からは66点)が入選しました。輪島展では全入選作品79点を展示します。なお、輪島市在住の作家による出品作品は4点です。

それでは、大賞の作品からご紹介します。新井寛生氏(東京都)の《乾漆蒔絵箱夜梅》(アート部門)は、古今和歌集の「春の夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やは隠るる」を題材にした作品です。夜闇の中で、姿は見えずともひっそりと美しい香りを漂わせる花のような作品にしたいという想いで制作されました。麻布を漆で貼り重ねて成形する脱乾漆技法を用いており、甲面は透漆の奥に潜む金粉がほのかに輝き、縁の金梨子地が暗がりには浮かぶ梅花の輪郭を思わせます。身の側面に静かに表された凹凸が、静寂な夜の雰囲気醸し出しています。

アート部門の金賞は、藤田和氏(石川県)の《た

ゆたう1》です。漆とガラスを組み合わせた作品で、光の通り道ができるよう工夫がされています。波に身を任せて揺れる海の生き物をモチーフに、漆、金粉、鮑貝、ガラスそれぞれの素材の美しさが存分に引き出され、ずっと覗き込んでいたくなる美しさがあります。

デザイン部門の金賞は、白川明美氏(青森県)の《七々子塗盛器「朱玄」》です。天板を外すと、内に黒漆塗の器が納められ、外した天板も盛器として使用できます。蓋を開けずにそのままの状態でもアートとして飾ることができるため、現代生活に適した作品として高く評価されました。他にも多彩な力作が揃います。個性豊かな作品の数々をお楽しみください。(北澤瑞希)



【大賞】
新井寛生 《乾漆蒔絵箱夜梅》



【アート部門 金賞】
藤田 和 《たゆたう1》



【デザイン部門 金賞】
白川明美 《七々子塗盛器「朱玄」》

「生新の時2023―漆芸の未来を拓く―」 トークイベントレポート

「生新の時2023―漆芸の未来を拓く―」は、漆芸を専攻する全国8つの大学、大学院が参加する毎年恒例の展覧会で、本年も金沢美術工芸大学、金沢学院大学、富山大学、東京藝術大学、京都市立芸術大学、東北芸術工科大学、広島市立大学、沖縄県立芸術大学からの多岐にわたる作品を展示することができました。

去る6月10日（土）には、本展関連事業であるトークイベント「作品のルーツを探る―大学教育の伝統と革新―」が開催されました。関係大学の学生や指導者の皆さんはもちろん、市内外の漆芸に携わる方々のご参加もあり、コロナ禍以後久しぶりに会場を埋め尽くす光景が見られました。初めに、本展並びに過去の出品者3名から、自身の作品や制作活動について発表がありました。森田志宝氏（富山大学大学院修了）は糸に漆玉を連ねた制作で素材との対話を続けながら産地にも従事し、北浦雄大氏（京都市立芸術大

学大学院修了）は現代人の安寧を求める心情を独自の造形に託しています。スウェーデンでの留学経験を経た矢部桜氏（東京藝術大学大学院修了）は広い視野で自身の漆芸表現を高める重要性を語りました。続いて、京都市立芸術大学教授の安井友幸



氏がコーディネーターとして加わり、大学教育と個々の作品制作との繋がりについて討論となりました。各参加大学の特徴的なカリキュラムを比較しながら、学生たちの制作にどのような生かされているのかが紹介されました。

3名の発表者からは、大学で学んだ基礎技術の修得や知識の蓄積により、幅広い表現への関心や追求意欲を喚起されたとの体験談の披露がありました。将来の制作に向けて悩みも多い学生たちに対し、勇気付ける言葉の数々がかけられたことが印象に残りました。

（福江里美）

石川県輪島漆芸美術館友の会 日帰り見学会実施報告

6月23日（金）、友の会による日帰り見学会が30名の会員の方々のご参加で実施されました。

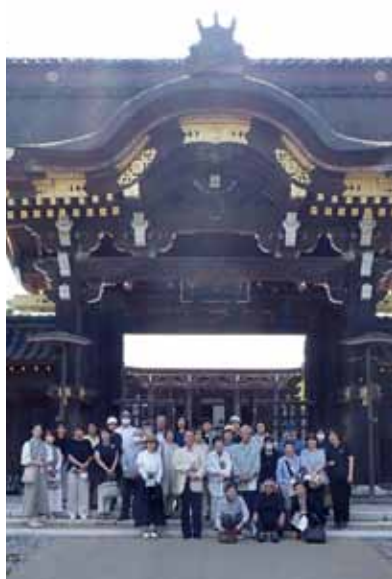
まずは、富山県水墨美術館の企画展「花のお江戸ライフ―浮世絵にみる江戸っ子スタイル―」を芸芸員の方に解説をいただきながら観覧し、江戸時代を代表する芸術の浮世絵を楽しみました。庭園もとてもきれいで広くゆったりと過ごすことができました。

午後は鋳物製造の能作と雲龍山勝興寺の見学です。高岡で400年にわたって受け継がれてきた鋳物づくりの工程をガイドの方に分かりやすく案内していただき、伝統技術をじっくりと体感しました。

2022年に国宝に指定された勝興寺ではガイドの方について学ぶことができました。

天候にも恵まれ無事に終えることができました。各見学先で丁寧な説明をいただいた皆さまやご参加の皆さま、誠にありがとうございました。

（長谷川千里）



雲龍山勝興寺（富山県高岡市）

「漆風怒濤—現在を駆け抜ける髹漆表現—」

関連プログラム

アーティストトーク『髹漆の現在地から未来へ』

林 暁 × 田中 信行

10月14日(土) 13:30~15:30 (開場 13:00)

会場 石川県輪島漆芸美術館 講義室

定員 60名 要予約・参加無料

プレミアムトーク『髹漆の魅力を探る』

檀 ふみ × 室瀬 和美 × 小森 邦衛

10月21日(土) 13:30~15:00 (開場 12:30)

会場 石川県立輪島漆芸技術研修所 講堂

定員 80名 要予約・参加無料

申込み 先着順・定員に達し次第締切

電話にて申込みください TEL0768-22-9788

主催/文化庁、厚生労働省、石川県、石川県教育委員会、輪島市、輪島市教育委員会、いしかわ百万石文化祭2023実行委員会、いしかわ百万石文化祭2023輪島市実行委員会、石川県輪島漆芸美術館

ふれて感じる、うるしの温もり企画

10月7日(土) ~10月9日(月・祝)

共催 輪島沈金業組合、輪島蒔絵業組合

輪島塗職人による実演(見学無料)、輪島塗沈金・蒔絵体験(各4,000円)、輪島塗製品販売などもりだくさん!

アート&ポエムコンクール作品展

10月7日(土) ~10月15日(日)

会場 当館エントランスホール (入場無料)

いしかわ文化の日 入館料無料

10月15日(日)

体験型講座参加者募集!

あなたも拭き漆名人! 飛びカンナのフリーカップ

11月26日(日) 9:30~12:30

講師 西端良雄氏(木地師)

会場 当館講義室

参加費 6,000円

定員 15名(中学生以上)

申込み 11月2日(木)まで 定員に達し次第締切

電話にて申込みください



〒928-0063 石川県輪島市水守町四十苅11番地

TEL 0768-22-9788/FAX 0768-22-9789

www.art.city.wajima.ishikawa.jp



開館時間 9:00~17:00

入館は閉館の30分前まで

休館日 11月27日(月) - 12月1日(金)

12月27日(水) - 31日(日)

2024年1月22日(月) - 2月2日(金)

交通案内

- のと里山空港から 車(約20分)
- 金沢駅から 北鉄バス輪島特急線を利用(約130分)
- 金沢市内から のと里山海道を利用(約100分)
- 道の駅・輪島ふらっと訪夢「輪島駅前」からのらんげバス海コース利用(10分)「漆芸美術館」下車または徒歩(約15分)